



ホワイト・ クリスマス

12月12日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

12月12日のおはなし「ホワイト・クリスマス」

洞窟の中にはたくさんの気配がある。同志だけではない。同じように追いつめられ、居場所を失ったものどもが吸い寄せられるように集まってここに吹き溜まっているのだ。ところどころの壁に疎らにかけられたランプの光に照らされ、ぎらぎらとした目ばかりが浮かび上がる。一見感情の乏しい無数の目が、闇の中に熱を持った強い光を放つ。

初めてここに来た日のことを思い出す。案内された洞窟はあまりに暗く何も見えなかった。あの日、青空は深く濃く突き抜けるようで、地を覆う純白の雪の照り返しで目をやられていたせいもある。痛む目は涙ぐみ血走っていたに違いない。洞窟に入って幹部の挨拶を受けていたあの時、私にはほとんど何も見えていなかった。声を頼りにそちらを向き、返事をするだけだった。

けれど闇に目が慣れて来たのだろうか。ある瞬間、不意に彼らの目が見えた。大きな空間に身じろぎもせずに座り、ただこちらを見つめる彼らの目が見えた。たぎる油のような光が見えた。怒りでもなく悲しみでもなく、ただ覚悟を持って時の来るのを待つ者達の視線を見つけた。その時、雪目のためだけではなく涙が溢れ出し、彼らも涙を流しながら私を迎えてくれた。あの日のことを思い出す。

簡易ベッドから身を起こすと、さらにたくさんの目が一斉にこちらに向けられる。命令を待つ目。いったん号令が下ればただちに飛び出して行って、なすべきことを成し遂げようという固い決意を秘めた目。王族としての私の血はそれを当然のこととして誇らしく思うだけだが、その無防備なまでの忠誠心に一抹の危惧を覚えている。思考停止した屈強な手下たちの数を誇るようでは、あの忌まわしい者どもと同類だ。

ベッドから降りる。全身の節々が非常に痛む。背を伸ばし戸口に向かう。数人の腹心がすぐに周りを固める。それを見て私は自分の背がこんなに高かったのかと改めて驚く。今なお私の身長は伸びている。それが何を意味するのか私にはわからない。洞窟で大半の時間を横になって過ごすことが理由なのか。けれども私以外に身長は伸びたなんて話は聞かない。

一族が長命種だという話を聞いたことがあるので、ことによると私はまだ成長期なのかもしれない。もう50歳だということにまだ私は成長している。そのおかげで、彼の国の情報組織では私には身長異なる影武者がたくさんいると言われているらしい。そう思わせておけばいい。彼らの浅い理解力では及びもつかぬ世界があることに驚けばいい。

洞窟の外に出るとそこにはただ乾燥した大地が広がっている。その風景は私の生まれ育った土地にどことなく似ている。故郷では滅多に雪は降らないが、ここでは冬ごとに雪に閉ざされる。間もなくあたりは一面の白に覆われるだろう。あの者どもの世界も同じだ。降りしきる雪に閉ざされる。極東の国では死の灰と呼ばれている。彼らが2度も炎を降らせた国だ。今度は彼ら自身がその雪に凍えることになる。炎の次は雪だ。

かたわらにいた一人が尋ねてくる。

「作戦名は？」

ずっとそのことばかり考えていたから、ふと口をついて出た。

「砂漠に降る雪」

「砂漠に降る雪。詩的ですね。どういう意味です」

特に意味はなかった。けれどこれもまた簡潔な返事が口をついて出た。

「驚きだ」

「驚き。信じられない光景を見せてやりましょう」

「そう、驚きだ」私は頷く。「彼らには決して想像も及ばぬ世界を見せてやろう」

(「砂漠に降る雪」 ordered by たけちゃん-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

ホワイト・クリスマス

<http://p.booklog.jp/book/40426>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40426>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40426>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.